

Title	「トランスナショナル」な歴史を書くこと：スコットボローからミュンヘンへ：1930年代イギリスにおける人種と政治文化
Author(s)	ペニーバッカー, スーザン
Citation	パブリック・ヒストリー. 2013, 10, p. 75-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66515
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「トランスナショナル」な歴史を書くこと ——スコッツボローからミュンヘンへ

1930年代イギリスにおける人種と政治文化⁽¹⁾

スーザン・ペニーバックャー

堀内真由美（訳）

トランスナショナルな歴史とは何か。複数の地域や大陸を横断するヒト、モノ、美術品、思想や政治運動を追跡しようとする流行は、近年の歴史学を席卷してきた。拙著 *From Scottsboro to Munich: race and political culture in 1930s Britain* を2009年に出版したとき、その数年前イヴ・ローゼンハート、ジェームズ・ミラー両氏と共著で論文を発表したときと同様に、「トランスナショナル・ヒストリー」の業績として歓迎された。本稿では、この拙著の議論を今一度たどりながら、「トランスナショナリズム」というアプローチを解説し、より重要なことであるが、「トランスナショナルな歴史」は何を明らかにできるのかを問い直したい。すなわち「トランスナショナルな歴史」は他の伝統的歴史学にどう異議申し立てをするものなのか。従来ならば「世界史」の問題と呼ばれたような事柄に、「トランスナショナルな歴史」の方法論を使うことに、どのような長所や短所があるのだろうか。なお、現時点で最新の史料的寄与が期待できることから、本稿でも拙著で取り上げた主要な史料に注目しながら議論を進めていくこととする。

まずは大きな疑問から始めよう。「人種」——それはあまりに幅広い意味を持つ言葉だが、アラバマ州に始まりナチス第三帝国で終わるイギリスの現代政治文化史にどう表れているかという問いである。スコッツボロー裁判とそれにまつわる出来事は、1931年春、アラバマ

(1) 本稿は、2012年6月4日に行われた「大阪大学グローバルヒストリー・セミナー」での報告原稿に加筆・修正を施したものである。報告の場を設けてくださった大阪大学の秋田茂先生、セミナーでホスト役をしていただいた中野耕太郎先生、コメンテーターと本稿の日本語訳を引き受けてくださった堀内真由美さんに御礼申し上げる。なお、拙著 *From Scottsboro to Munich: race and political culture in 1930s Britain*, Princeton, 2009 から、本稿では pp. ix-xiv の資料および pp. 279-339 の註の中からいくつか引用している。引用を許可してくださったブリジット・ヴァン・ラインバーグさんとプリンストン大学出版にも感謝したい。

(2) *Ibid.*; James A. Miller, Susan Pennybacker and Eve Rosenhaft, "Mother Ada Wright and the International Campaign to 'Free the Scottsboro Boys,' 1931-34," *American Historical Review*, vol. 106, no. 2, April, 2001, pp. 387-430 を見よ。また関連文献として、James A. Miller, *Remembering Scottsboro: the legacy of an infamous trial*, Princeton, 2009 がある。



図1：フリート・ストリートを歩くアダ・ライトとボブ・ロヴェル、1932年、ロンドン

出典：RGASPI (Russian State Archive of Social-Political History, Moscow)

州北部で始まった。ミュンヘンは、その7年後の1938年9月、イギリスとフランスがムッソリーニの仲介で開催し、ヒトラーに宥和を試みたあの会議の場所だった。では、図1の写真にあるテネシー州チャタヌーガからやって来た家事使用人アダ・ライト——1932年の夏、毅然とした面持ちでフリート・ストリートを歩いている——は、そこで何をしているのだろうか。彼女のこの堂々とした様子は、ミュンヘン会談およびその結果とどのような関係があるのだろうか。大戦間期の人種的政策の下で未完に終わった仕事と、それらに対して声を上げ働きかけた個人の人々の生涯とに、1930年代のイギリスとロンドンはどのように共振したのだろうか。

これらの問いと、問い相互の関係を考えるとき心に留めておかねばならないのは、地球面積の4分の1を覆い、当時のインドの人口だけでも地球人口の4分の1、3億5000万人以上の人々を支配したイギリス帝国という存在である。ハーバード大学の歴史学者、ニール・ファーガソンはベストセラーとなった『帝国——イギリスはいかにして近代世界を創出したか』(*Empire: How Britain Made the Modern World*)の末尾に、第2次世界大戦に関して次のように書いた。

…ヒトラーの悪しき帝国主義に対抗したのはイギリス帝国の他にはない。イギリス帝国は、チャーチルが期待を込めて語ったように何千年も永続することがなかったにせよ、当時、最善の時期にあったのだ。さらに帝国を高貴ならしめたのは、帝国のヒトラーに対する勝利が多大な犠牲を払って得たものだったことである。結局、イギリスは日・独・伊のファシズムを食い止めるため、ひとり自ら帝国を犠牲にしたのだ。この犠牲をもって、帝国が犯したすべての罪を帳消しにすることはできないものか。⁽³⁾

これはうっとりさせる、しかも時宜にかなった問いだろう。ここでは、この問いに関してもう一つの考え方を活用しようと思う。そして、私たちがたとえどう回答しようとも、1930年代の多様な人種政治と、そこで声を上げた様々な人々を理解することなしに、この問いに答え

(3) Niall Ferguson, *Empire: How Britain Made the Modern World*, London, 2004, p. 363.

たことにはならないのだということを示したい。それではまず、もう一つのイギリスの首都、スコットランドのエディンバラへ向かうことにしよう。

1937年8月、アフリカン・メソジスト監督教会、第35代主教でアフリカ系アメリカ人であるウィリアム・ハードが、姪を伴って汽船でエディンバラを訪れた。進歩的な世界教会主義運動を支える「信仰と職制世界会議」に最年長の使節として参加するためだった。元奴隷であったハードは、聖職に就く以前には、アメリカ南部で黒人鉄道労働者たちを組織して1877年の反人種隔離法闘争に勝利し、1890年代にはリベリアのアメリカ総領事を務めていた。いまや90歳となったハードは、イギリスとヨーロッパ大陸で目立つ存在となってきた何百人ものアフリカ系アメリカ人の一人だった。第1次世界大戦の前には、すでに黒人指導者 W. E. B. デュ・ボイスがドイツの大学に留学したことがあったが、この戦争では、アメリカ黒人兵がジム・クロー（人種隔離）部隊としてフランス戦線で戦ったのだった。停戦後、余裕のあった兵士たちのなかにはヨーロッパを周遊し、パリやロンドンに住む者もあらわれた。また、アメリカの有力なアフリカ系新聞である *The Chicago Defender*、*Pittsburgh Courier*、*The Baltimore African-American* は、1930年代にはロンドンに事務所を構え記者を派遣していた。ハードの一行は、その意味で、アメリカ黒人としてヨーロッパを訪れる例外的な存在ではもはやなかった。しかし、ハード主教と姪は、その夏、エディンバラのホテルから宿泊を拒否された。アメリカ白人旅行客が、十分くつろげるよう人種分離の慣習をスコットランドでも実施し、黒人には部屋を提供するなど迫ったのだ。ホテルオーナーはそう申し開きをした（このような排他的な慣習はいまだ一般的で合法的でもあった。著名なアフリカ系アメリカ人俳優ポール・ロブソンが、その数年前にロンドンのサヴォイ・ホテルで食堂に入ることを拒否されたという一件があった）。

この事態に、同じ聖職者として誰より迅速に行動したのはウィリアム・テンブル、ヨーク大主教である。彼はハード一行に自宅の部屋を提供しようとした。テンブルは、ラディカルな僧侶で、公然たる社会主義者だった。1920年代に労働者教育協会で教べんをとり、反ファシストで親労働者の主張を熱心に説いていた。テンブルはまた、この時期からユダヤ人難民の救済事業にも活発だった。彼は1942年にはカンタベリー大主教に任命されることになる。さらにテンブルは、南アフリカのアパルトヘイトに対抗する「世界教会協議会」の中心人物でもあった。イタリア、ドイツ、スペインは、テンブル大主教が嫌悪するファシズム運動と人種的政策とに飲み込まれていた（スペインの町ゲルニカは1937年4月、フランコ軍を支援するドイツ空軍による爆撃を受け、同年8月、ヴァチカンがフランコ政権を承認した）。スコットランドには、キリスト教会を代表する客人——人種を理由に宿泊を拒否される元奴隷——の屈辱に対応する余裕はほとんどなかった。

しかしテンブル大主教の自宅は必要なかった。ハード一行はかれらを受け入れた小さなホテルに赴いた。それでも、イギリス内相ジョン・サイモン卿——もともと自由党国会議員で、右傾化していたマクドナルド連立内閣（1931-35年）の一員になっていた——は、この善良な黒人主教に直接会って謝罪の気持ちを伝えるべきだと個人的に感じていた。サイモンはその際、アイルランド出身で「反奴隷制度およびアボリジニ保護協会」の指導者だった妻キャサリン・

マニング・サイモンを伴った。キャサリンは、世界中で強制労働を余儀なくされている何百万人という人々のための救済活動を主導した女性である。ハードへの敬意を示すために、サイモン夫妻は首都から冷風吹くエディンバラへと急ぎ北上した。ハードはその二週間後、長旅を終え戻ったフィラデルフィアの自宅で亡くなった。彼の訪英と死は *New York Times* が伝えた。受け入れ先だったイギリスの人々は、この地での一件が、彼の死の原因になったのではなく、むしろ彼の帰路を心和むものにしたことに安堵の溜息を洩らしたことだろう。リベラルな寛容が広がったのだ。しかし、ハード主教はホスト側が期待したほど安楽な心持で亡くなったわけではなかった。

ハードが初めてイギリスを訪れたのは 1895 年のことだ。彼は 1920 年代には、「ロンドンとリヴァプールには、ニューヨークと同じくらい強い人種偏見が見受けられる地域がある」と書いている。⁽⁴⁾ 大戦間期イギリスにおける非白人は 2-3 万人で、1914 年以前に 2 人のインド系国会議員とロンドン行政区に黒人職員が数人いたが、大半は船舶労働者と移民労働者だった。イギリスの中産階級に属する非白人は極めて少数で、そのうちごく裕福な家庭の息子たちがイートン校とオクス・ブリッジに学んだにすぎない。同じ頃、ユダヤ系はその 10 倍の 30 万人以上いた。それでも、黒人はロンドンの文化的シーンにすでに長く登場していた。そして直接見たことはなくても、ロンドンっ子たちは、映画のほかミュージック・ホールの舞台や小劇場での黒人描写に慣れ親しんでいた。

I	II
<p>De Camptown ladies sing dis song Doodah, Doo-dah! De Camptown Race-track five miles long Oh, doodah-day! I come down dah wid my hat cav'd in Doodah, Doo-dah! I go back home wid a pocket full ob tin Oh, doodah-day! Gwine to run all night! Gwine to run all day! I'll bet my money on de bobtail nag Somebody bet on de bay...</p>	<p>We march along with a merry song, Doodah, Doodah We're all going strong and we shan't be long. Doodle, doodle, doo-dah-day We're out to see that an end shall be Doodah, Doodah, Of poverty and tyranny, Doodle, doodle doo-dah-day. Going to work all night, Going to work all day, Till the profit system's all washed up, Doodle, doodle doo-dah-day.</p>
<p><i>The Labor Party Songbook: every-day songs for labor festivals</i> (London: The Labour Party, Transport House, 1933) courtesy, <i>Labour History Study Centre, Central Lancashire University.</i></p>	<p><i>Workers' Music Association</i> pamphlet (circa, 1936) courtesy, <i>Labour History Study Centre, Central Lancashire University.</i></p>

図 2：『草競馬』(Camptown Races)

図 2 の I と II は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ロンドンのミュージック・ホールの典型的出し物だった『草競馬』(Camptown Races) の歌詞の抜粋である。I が掲載されたのは、「催事のための日常歌」というサブタイトルがつけられた 1933 年版『労働党歌集』で、当時国

(4) William Heard, *From Slavery to the Bishopric in the AME*, New York, 1969, p. 60.

内のどの町でも労働党支持者たちが携帯していたものだ。そしてIの歌詞は、1850年初版の『プランテーションの歌』に掲載されたスティーヴン・フォスターの『草競馬』の引用だった。『労働党歌集』にはこれ以外に、C. A. ホワイト作曲で1874年にボストンで出版された『南部に帰りたい』も掲載されている。「あのプランテーションが懐かしい / 私の家族や親せきたち / 私の心は南部に向かう / だから行かなくては」という歌詞である。さらに歌集のページを繰っていくと、1871年パリ・コミューンの時期、ユージン・ポチエが書いた第一インターナショナルの讃歌『インターナショナル』も登場する。⁽⁵⁾

図2のIIは別の歌集に掲載されたもう一つの『草競馬』の歌詞である。出版元は「労働者音楽協会」といい、1936年に設立された。労働党と比較するとはるかに小規模でセクト主義的であり、独・仏の共産党よりも支持者の少なかったイギリス共産党との関連が、誤って取りざたされることもある団体である。こちらの『草競馬』は、現代の読者には見慣れたものかもしれないが、スティーヴン・フォスター作の原詩に冷静な修正の手が加えられ、結果的に、よりプロレタリア志向で「ポリティカリー・コレクト」なものになった。⁽⁶⁾

しかしこの「進歩的」解釈の中にさえ、人工的に創られた黒人ことば「ドゥーダ」(“Doodah”)の繰り返しが残っている。アラバマで起きたスコッツボロー裁判の1か月後の1931年4月、国王ジョージ5世とメアリ王妃は、ロンドン・パラディオンで王室主催の「アレクサンダーとモーゼ」という minstrel・ショー〔訳者註:顔を黒塗りにし黒人に扮した白人によるショー形態。「アレクサンダーとモーゼ」では、フォスターの『草競馬』が挿入歌として歌われた。minstrelは、アメリカでは1820年代後半から人気を呼び、他ならぬフォスターも近隣の劇団でこの出し物に参加していたという〕の鑑賞に出席した。王室の一行には、チャールズ・ゲイツ・ドーズ夫人がいた。夫のチャールズはアメリカ大使で、国際連盟で大戦間期ドイツの賠償政策に関わった主要人物として、1926年にノーベル平和賞を受賞している。夫人は劇場で、南アフリカ総督の任務から戻ったばかりのアスローン伯爵の隣席となった。ちなみに、南アフリカのケープ・タウンにある2010年サッカー・ワールドカップの公式練習場に使用されたアスローン・スタジアムは、この伯爵の名を冠したものである。

そういうわけで、イギリスで『草競馬』を歌ったり聞いたりするのに労働党員である必要はまったくなかった。1930年代に共産主義者であれば、政治的異議を詩に込めて、労働運動の闘士的な詩に置き換えて歌っただろうが、それでもなお、アフリカ系アメリカ人のなまりを模した「ドゥーダ」の繰り返しはそのままだった。共産主義者などではなかった子どもの頃に耳にした、最も一般的な『草競馬』でも、「ドゥーダ」の繰り返しは登場していた。その調べは変わることなく、人種的な前提や姿勢のメタファーとして機能する。人種は特定の歴史的な結

(5) *The Labour Party Songbook every-day songs for labor festivals*, London, 1933, Song 30, p. 7; Stephen Collins Foster, *Plantation Melodies*, 1888; C. A. White, *I've Gwine back to Dixie: Companion to "Old Home Ain't What Is Used to Be,"* Boston, 1874; Workers Music Association Songsheet, "Doo-Dah-Day," London, n.d. 『労働党歌集』は、マンチェスターの民衆史博物館 (People's History Museum) 内、労働史研究センター (The Labour History and Study Centre: LHASC) にある。

(6) Workers Music Association, Songsheet, "Doo-Dah-Day," London, n.d. (LHASC).

びつきを示すのだ。それは、大西洋の向こうからやって来て、親しみやすく都会的な大戦間期のことばで語りかける。ハード主教もそのようなかれらを取り巻く前提から逃れられず、彼はまたそのことをよく分かっていた。主教の側に立って発言した人々も、このような時代の言語文化のなかに生きていたのである。

アメリカを旅した多くのイギリス人の報告を取り上げることによって、ミュージック・ホールとバラエティ・ショーから、ジム・クロー南部のリンチ事件へと、本稿の舞台を転換させることが容易になる。作家や政治家は30年代に頻繁にアメリカ南部を訪れ、イギリスの新聞は多くのリンチ事件を扇情的で露骨な言葉で報じた。1931年、悪名高いスコッツボロー裁判が始まり、9人の若い黒人の被告が2人の白人女性ホーボー（移動労働者）をレイプしたとして不当に有罪となった頃、あのステージの言い回しが被告側の言葉となった。アラバマで言い渡された死刑判決に立ち上がり、被告救済の国際的運動に参加した共産主義者や社会主義者や自由主義者たちは、プロレタリアートへの擁護に用いるものと混せて、『草競馬』のことばやイメージをしばしば効果的に使った。次の文章を見てほしい。以下は9人の若き被告によるものとされた。

From the death cell here in Kilby Prison, eight of us Scottsboro Boys is writing this to you. We have been sentenced to die for something we ain't never done. Us poor boys been sentenced to burn up on the electric chair for the reason we is workers-and the color of our skin is black...What we guilty of?⁽⁷⁾

（キルビー刑務所の死刑囚監房から、僕たちスコッツボローの少年9名のうち8名がこれをあなた方に書いています。僕たちはやっていないことで死を宣告されました。労働者で肌の色が黒いという理由で、電気椅子の上で死ぬと言われたのです。僕たちが何をしたというのでしょうか〔訳者註：引用英文中の、主語の人称によって動詞やbe動詞が変化しない点や、be動詞の否定形にain'tを用いることなどが黒人英語の特徴といわれている〕。)

被告ロイとアンディの母であるアダ・ライトは、1932年の夏、ジム・クローのアメリカから船でドイツへと渡った。彼女は、ハンブルク港に停泊中の船内で、国際労働弁護団のリーダー、ルイス・エンゲダールと面会した。ハンブルクは当時のヨーロッパ共産主義運動の中心地で、共産党は、市内の港湾部に多数居住した黒人とアジア系船舶労働者たちの間で活動を展開した。リヴァプール、ブリストル、カーディフ、ロンドン、マルセイユ、パリと並んで、ハンブルクは1930年代のヨーロッパ世界における最大の非白人居住地域の一つだった。

祖母が奴隷だったアダ・ライトは、原始バプテスト教会の信徒で、テネシー州チャタヌーガ出身の家事使用人だった。彼女のイギリスおよびヨーロッパ訪問は、労働者救済と宣伝活動の巨大なネットワーク、「レッド・エイド」の援助が可能にしていた。「レッド・エイド」は、モ

(7) “Scottsboro Boys Appeal from Death Cells to the Toilers of the World,” *The Negro Worker*, May 1932, cited in Philip S. Foner and Herbert Shapiro, *American Communism and Black Americans: a documentary history, 1930-1934*, Philadelphia, 1991, pp. 292-93.

スクワを拠点に全世界の共産主義政党を指導する国際組織、「第3インターナショナル」(コミンテルン)の傘下にあった。しかしライトはその夏の旅で、共産主義者たちのほかに大勢のヨーロッパ人と出会った。自由主義者、社会民主主義者、労働組合主義者、そして一般の市民。かれらはライトが演説を禁じられていた場にも、話を聞こう、あるいは一目彼女を見ようとやって来たのだ。いったん話すことが許されると、ライトは息子たちの解放要求を強調するため、19世紀のメロドラマに出て来るような奴隷の姿をしばしば引き合いに出して訴えた。1932年、ライトはロンドンとイングランド中部諸州に10日間滞在し、スコットランドとウェールズも訪れた。図1は、イギリス国際労働弁護団の一人で労働運動活動家であるボブ・ロヴェルとともに、ロンドンのフリート・ストリートで行われる記者会見へと向かうライトの姿である。

ライトが帰路についた後の数年間、イギリスで、スコッツボローの被告たちのための熱心な支援運動が詩人ナンシー・クナードによって展開された。彼女は支援活動のためにロンドン中のあらゆる政治的組織と協働した。その一つに「反帝国主義同盟」がある。これは、1927年ブリュッセルで創設された「反植民地抑圧同盟」という、多くのイギリス人活動家が関わった国際組織の後続組織にあたる。クナードは一度も共産党に加わらなかったが、彼女のスコッツボロー・キャンペーンへの取り組みは、ロンドンのユダヤ教チーフ・ラビから、詩人エズラ・パウンド、作家オーガスタス・ジョンら、クナードの芸術・文芸分野の旧友まで、多数の著名人から署名を集めることを可能にした。イギリスとヨーロッパ大陸からは、俳優チャーリー・チャップリン、物理学者アルバート・アインシュタイン、作家ハインリヒ、トーマスのマン兄弟、レナード、ヴァージニアのウルフ夫妻、劇作家サミュエル・ベケットらが署名に加わった。ロンドンの芸術・文芸界の著名人たちを囲んで、在ロンドンのアフリカ系アメリカ人も参加する、ダンスパーティーやコンサートなどによる寄付集めが行われた。1933年夏、ロンドンのフェニックス・シアターでは、ミシシッピ・ページ・ボーイズ、ブラック・フラッシュャーズ、ゴールドコースト・カルテット、ブラックボトム・ジョニーによるチャリティー・コンサートが行われた。

こうしたクナードの親しい仲間のなかにいたのが、ジョージ・パドモアだった。パドモア、本名マルコム・ナースはトリニダード出身の知識人で、アダ・ライトのヨーロッパ訪問時にはコミンテルンの在ハンブルク黒人局を指導していた。奴隷の孫であり教師の息子であったパドモアは、故郷では医学生だったが、1924年にポート・オブ・スペインを発ってニューヨークへ向かいアメリカ共産党に入党する。しばらくテネシー州のフィスク大学にいたが、活動こそが情熱の源泉だった彼は、中国について講義を担当していたナッシュビルのヴァンダービルト大学を含め、各地でイギリス統治の問題を論じ始めた。ハーワード大学では、ラルフ・バンチと作家アラン・ロックの授業に参加し、未来のナイジェリア大統領となるベンジャミン・アジキウェと出会う。その後、妻のジュリア・センパーと娘ブライドン・ナースを置いてニューヨークを発ち、ソビエト連邦モスクワへと向かう。パドモアはこれでアメリカのビザを失い再度の入国を禁じられた。モスクワでは亡命活動家の国際的グループに加わり、片山潜のような人物とも出会っている。そして、ハンブルクでの仕事に着手するようモスクワからドイツへと派遣

されたのである。

スコッツボロー支援活動をはじめ、コミンテルンの労働者救済と擁護活動をヨーロッパで中心的に担い、パドモアの同志となった人物に、出版界での実力者でもあったヴィリ・ミュンツェンベルクがいる。彼は労働者階級出身で、かつて1918-19年のドイツ革命にも参加したドイツ共産党の青年リーダーだった。その当時ミュンツェンベルクの仲間には、アメリカの共産主義運動の指導者で第1次世界大戦時フランス戦線の兵士だったジェームズ・フォードや、のちにパドモアとも親しくなるフランス領スーダン出身の元教師で活動家のギャラン・クヤテらがいた。パドモアは、ニューヨークからポート・オブ・スペイン、ケープ・タウン、ナイロビ、パリへと向かう船内で売られ、ひそかに聖書に隠して持ち込まれる *The Negro Worker* という地下出版物の編集をしていた。彼はイギリスを含めヨーロッパにおける労働搾取について、そこに潜む帝国主義を皮肉たっぷりに批判し、レーニンが国際連盟をさして言ったとされる「盗人たちの台所」という表現を好んで用いるようになる。

パドモアは、本稿が取り上げる群像のなかの中心的人物である。20世紀に一人の非白人知識人がヨーロッパの政治文化に介在した最も決定的な痕跡の一つが、彼のペンと肉声と分析能力のなかにあるのだ。1930年代から20年以上にわたって、共産主義版も含むあらゆる『草競馬』を拒みつつ、彼は大半の時間をロンドンで過ごした。パドモアは組織化された共産主義というものに満足することは決してなかった。共産党内部にある人種問題との闘いは、まだ彼がコミンテルンの一員であった30年代初頭の書簡にも見て取れる。しかし一方で *The Negro Worker* は、大戦間期の他の左翼宣伝活動と同様に、ソ連邦を、エスニックの違いを超越した人種調和的な政体だと主張した。この神話は、30年代のアフリカ系アメリカ人や仲間の旅行者たちにとっては強い影響力があり、多人種の融合と人種の向上を賞賛する主張は、アメリカ南部の人種主義者イメージに対抗してしばしば使われる、ソビエトの教義の柱だった。他方、イギリス独立労働党の機関紙 *New Leader* は反スターリン路線をとった。シベリア収容所と「反革命分子」を糾弾したモスクワ裁判について書き、また、多民族融和を喧伝するソ連邦コーカサス共和国の、微笑む子どもたちの写真も掲載した。

1933年2月、ヒトラーによる権力掌握の数週間後、パドモアはハンブルクで逮捕された。数か月間収監された後、保釈されてイギリスに送還される。皮肉にもパドモアは帝国臣民としての権利を保障されたわけである。もっとも、イギリスに着くや否や公安当局の尾行がつき、黒人に部屋を貸してくれる家主をロンドンで探すのに数週間かかった。パドモア編集による地下出版物 *The Negro Worker* の最終号は、ドイツのファシズムについて書いている。

ファシズムは、白人労働者だけが直面している危機ではなく、黒人に対しても非常に敵対的であるということ、植民地でもヨーロッパやアメリカでも黒人の多くはまだ十分認識していない。…ドイツで権力を握る前ですら、ファシストどもは黒人やユダヤ人に対して最も暴力的な扇動を繰り返していた。…アダ・ライト一行のヨーロッパ歴訪の際、ベルリンのナチ党新聞 *Angriff* は、彼女を逮捕しドイツから追い出せと書いていた。*Angriff* の編集

者は、アラバマのリンチを起こした連中との連帯を表明し、黒人に身の程を知らしめるのはリンチしかないと、公然と書いたのである。⁽⁸⁾

しかし、イギリスでのパドモアとモスクワのコミンテルン当局とのつながりは続いた。彼の作家兼オーガナイザーとしての新時代は、イギリス領アフリカとカリブ海植民地における、独立と社会的正義のための運動と密接に関わるなかで築かれていった。いまや彼は、これらの問題に怠慢だったスターリン主義というものから解放されていた。パドモアの言葉はヨーロッパ中のファシスト組織に向けて広がっていった。共産主義者たちは、パドモアを、アフリカのリベリアにおける黒人による政治体制に肩入れしすぎたとし、それを党則違反にあたると非難した。アメリカ共産党議長アール・ブラウダーに対するパドモアの容赦ない回答は、「全国有色人向上協会」の機関紙 *Crisis* に掲載された。「黒人は白人の多くがいまだに思っているような「大きな子ども」などではない。まだ鎖につながれているとはいえ、我々は自分でものを考えることができるのだ。」⁽⁹⁾

パドモアはギャラン・クヤテや *North Star* と *Le Cri Nègre* の出版関係者たちとともに働き、ロンドンとパリの間を行き来した。ロンドンでの同居人や仲間には、後に妻となるドロシー・パイザー、未来のケニア大統領ジョモ・ケニヤッタ、そしてアフリカ経由でロンドンに来ていたラルフ・バンチらがいた。パドモアは、「国際エチオピア支持者の会」と「アフリカ支持者奉仕事務所」の立ち上げを支援した。これらの組織は女性参政権運動の元リーダーだったシルビア・パンカーストとも連携した。パンカーストの発行する *The Ethiopian Times and Orient Review* は、ムッソリーニのアビシニア(エチオピア)侵攻に反対する中心的機関紙だった。これらの組織は、イギリスに亡命中のエチオピア皇帝ハイレ・セラシエを支持していた。パドモアはソ連の国際連盟加入決定と、ムッソリーニとの石油取引について批判記事を書いた。1935年10月、イタリア軍はアビシニアを軍事侵攻し、アジス・アベバは1936年5月に陥落した。皇帝を追い出した「リベラルな人道主義者たち」の成功を喜んでおきながらエチオピア人民を助けなかったとして、パドモアはイギリスの社会主義者および共産主義者を批判した。「植民地の人々と支配される民族の権利のために戦う偉大で勇敢な闘士たちは、ガスマスク一つ、救急車一台、ましてや財政的援助すらアビシニア人を救済するために与えることはしなかった。それは昨日アビシニアで起こったが、今日はスペイン、そして明日は…？」⁽¹⁰⁾

パドモアはその頃には国会議員ともしばしば行動をともにしていた。英領カリブ海植民地でストライキが頻発するにつれて、アメリカの黒人メディアやイギリス独立労働党の機関紙 *New Leader* に寄稿することで、故郷の西インドでのストライキに向けるイギリスの態度を繰り返し批判した。パドモアは「全国有色人向上協会」の機関紙 *Crisis* に次のように書いた。

(8) "Fascist Terror against Negroes in Germany," *The Negro Worker*, vol. 3, no. 4-5, April-May, 1933, p. 1.

(9) Russian State Archive of Socio-Political History (RGASPI), Moscow 495/155/98, p. 1.

(10) George Padmore, "Abyssinia Betrayed by the League of Nations," *The Crisis*, June, 1937, p. 166.

グラスゴーの帝国博覧会開催の前夜、博覧会総裁のエルギン卿が、国王と王妃は帝国臣民の平和と繁栄への輝かしい貢献の象徴であると告げた頃、ジャマイカでは、生活賃金を求める現地の労働者に向けて警察が発砲し銃剣でかれらを突いていたのだ。⁽¹¹⁾

パドモアは、彼の1950年代の回想録 *Pan-Africanism or Communism: the coming struggle for Africa* の中で、ジョン・サイモン夫人、キャサリン・サイモンの有色人への尽力についても触れている。⁽¹²⁾ パドモアは、夫ジョン・サイモンの政策とキャサリン自身のアフリカへの認識については巧みにはぐらかし、キャサリンを批判的にしてはいない。しかしジョン・サイモンはミュンヘン会談における重要人物であり、会談に先立って行われたムッソリーニとの交渉でも中心的役割を担った。サイモン夫妻は反奴隷制活動家だった。長年、イタリアの反奴隷制組織は、サイモン夫人とその活動仲間と協力関係にあった。皇帝セラシエのアビシニアにおける奴隷制問題はイギリスの反奴隷制組織にとっても中心的課題であり、イタリアのエチオピア占領への野望を注視し、ムッソリーニに、アフリカにおける改革者としての希望を託したのだった！セラシエ自身は人身売買を抑えると宣言したが、ムッソリーニの軍隊は全土的な奴隷制禁止を求めた。1935年のイタリアによる侵攻は1万5000人の死傷者を出し、3万人のアフリカ人が37年の反乱で虐殺された。それまであった奴隷制は、道路建設などへの強制労働に置き換えられた。しかしイギリス人は、ムッソリーニを怒らせないように、このような情報を隠した。リベリアを除きアフリカで唯一の独立国がファシストに征服されるなかで、反奴隷制は、イギリスがムッソリーニを支持するための方便として機能し続けるのである。ジョン・サイモンのもう一つの気まぐれは、一方ではスペイン共和派への援助を拒みながら、王党派の攻撃による犠牲者に情け深い姿勢を示したことだ。

サイモン夫人は自身の政治的な関わりを否定したが、イタリアによるアビシニア侵攻を明白に擁護していた。「アビシニアではここ数年間、反奴隷制への偉大なる進歩がなされてきたという事実を私たちは率直に受け止めるべきだ」。イタリアは「よき植民地行政官であり…現在もエチオピアに農作物の栽培を指導しようとしている。アフリカの別の地域でも白人文明がもたらされることが期待される」と夫人は述べた。⁽¹³⁾

ミュンヘン会談が近づくにつれ、帝国の領土は和平のために交換しようという議論が高まった。1936年に出版された *How Britain Rules Africa* のなかでパドモアは、ヨーロッパを「領土の拡大と再分割への絶望的な戦いに飲み込まれている」と表現した。そのうえで、和平は植民地の行動と支援を必要とするとし、「ヨーロッパは、自らを植民地の民衆の手で解放してもらう必要がある」と説いた。⁽¹⁴⁾ ミュンヘン会談が始まると、パドモアは「ヨーロッパの困難はアフ

(11) George Padmore, "Labour Trouble in Jamaica," *The Crisis*, Sept. 1938, p. 287.

(12) Id., *Pan-Africanism or Communism: the coming struggle for Africa*, New York, 1956.

(13) Lady Simon Papers, Rhodes House Library (Oxford), MSS. Brit. Emp., s. 25 13/5, "Abyssinia."

(14) George Padmore, *How Britain Rules Africa*, London, 1936, pp. 386, 393, and 395.

リカの好機である」と辛らつに言う。⁽¹⁵⁾元植民地官僚レナード・バーンズのような白人活動家たちも、この問題に活発に発言した。

植民地が我々にとって善きものなら、それはドイツにとっても善きものだ。ドイツにとって悪ならば我々にとっても悪だ…ナチの人種理論を嫌う者がどれほどいようと、ナチの政策が、世界中の植民地の黒い肌の人々との関係においてヨーロッパ人が取る行動の主動力となっているのは事実である。人種偏見という点で、ナチス・ドイツとイギリスとの間に確たる違いなどない。⁽¹⁶⁾

ところで、1939年の時点で、インドほどイギリスの運命にとって影響のある植民地は他になかった。アビシニア侵攻とミュンヘン会談の前に、ジョン・サイモンは有名な「サイモン委員会」を率いて、自治の可能性をさぐりにインドを訪問した。委員会メンバーは全員が白人だった。インド訪問中、委員会は「サイモンくたばれ」「サイモン帰れ」しまいには「サイモン地獄に落ちろ」などという激しい敵意に直面する。イギリス政府はその後、インドの太守、植民地政策立案者、政治家らをロンドンの会議に召集した。マハトマ・ガンディーが第1回円卓会議のためロンドンにやって来たのは1931年のことである。

当時、帝国への反逆罪に問われた被告への裁判がインドで行われており、31人の活動家がデリー北西にある英国軍駐屯地であるメーラトに収監されていた。3人の白人イギリス共産党職員を含む、軍人、オーガナイザー、活動家たちが、ボンベイやその他の都市で行われた大規模な織工たちのストライキの直後、自宅に踏み込まれて拘束されたのである。メーラト裁判は1929年から32年にかけて続き、イギリス帝国史上、最大の反逆罪訴追となった。白人とインド人の合同裁判は悪名高いものだったが、ミュンツェンベルクやパドモアラスコットボロー裁判を支援した人々は、スコットボロー事件とメーラト事件とを関連付け、アメリカとインドを含んだまさに地球的規模で、被告たち全員の解放を求める運動を展開した。

メーラトの囚人のために帝都で最も活発に発言した人物は、ロンドン南部バタシー区選出の独立労働党国会議員、シャプルジ・サクラトヴィラである。1874年、タター族の裕福なゾロアスター教徒の家庭に生まれたが、インドの人種差別とロンドンの貧困をつぶさに目撃したあと、一族の望む仕事を捨てて社会主義者となった。第1次世界大戦前、彼はシルヴィア・パンカーストとともに参政権運動と社会主義運動に取り組み、最終的にはイギリス共産党に参加した。議会ではイギリスのインド統治をあからさまに批判した。

帝国支配体制下の英国王がインドにおいて保持すると言ひ募るごとき、専制的かつ恣意的な権力を、一日たりとも許容する者が、今日のブリテン男女の一人たりとも、あるいはヨー

(15) James R. Hooker, *Black Revolutionary*, New York and London, 1967, p. 53 より引用。

(16) Fabian Colonial Bureau papers, Rhodes House Library (Oxford), 2/3, item 34, "The Colonial Question," *International Affairs*, 1938, p. 7.

ロッパのいかなる国…バルカン諸国、イギリスほどにはまだ発展を遂げていない小国の中に、一人でもいるだろうか？⁽¹⁷⁾

サクラトヴィラは熱心なゾロアスター教徒であり、イギリス共産主義者のなかでは一風変わった人物だった。彼と妻サラ・マーシュは自分たちの子どももゾロアスター教に入信させている。「サック」という呼称で知られた彼は、しかし、ソ連邦内のコーカサス地方に広がる共和国を多民族共存の理想とする、熱心なスターリン主義者でもあった。彼の政治信条は、極左のインド人のなかでは決して珍しいものとはいえなかった。というのも、第1次世界大戦の頃にさかのぼれば、多数のインド人活動家がベルリンから活動を展開した一方で、ガーダー党のアナーキストらはサンフランシスコを活動拠点に選び、また別のインド人過激派グループは、アメリカのアナーキスト、エマ・ゴールドマンと強い結びつきを持つ、そういった状況だったからである。

1932年、アダ・ライトがロンドンにやって来たとき出迎えてくれた一団のなかにサクラトヴィラはいた。彼は、当時ロンドンのハイド・パークでしばしば演説をしていたが、1933年、ドイツの国会議事堂が放火された事件で被告とされた人々の裁判についても、大衆を前に熱く語った。彼はパドモアとこの事件に関する論陣を主導した。1936年の死まで綴っていたメモのなかに、信頼できるインド人弁護士をドイツ国会議事堂放火事件の最終審に参加させるべきだと、イギリスの共産党指導部に進言したことを書き残している。

しかし何事も起らず、純粹なるヨーロッパの共産主義が植民地の同志たちの間で嘲笑の対象になった。インド人やアフリカ人は、このような裁判が、当該地域でのイギリス帝国主義的裁判に対する健全な抑止機能を果たすようになるかもしれないと感じている。しかしかれらは国際的活動と連携をとってはいない。これらは些細な事だが大きな影響を持つ。インドでは、ある層の若い世代の間で国際協調主義は信用されなくなってきており、イタリアとドイツのファシズムが強力なナショナリズムの好例だと見なされているのだ。⁽¹⁸⁾

サクラトヴィラが言及したドイツ国会議事堂放火事件裁判を振り返れば、そこには大戦間期における一連の人物や場面がつなぎ合わされ、一つの絵画に凝縮されているかのようだ。

ドイツの左翼運動への抑圧は、最終的には圧倒的多数のヨーロッパのユダヤ人に向けられるのだが、それは1933年のヒトラーによる権力掌握とともにさらに強められた。ヴィリ・ミュンツェンベルクはその頃まだドイツ共産主義運動のリーダーであり、ナチの権力掌握に対する批判を展開していたが、妻バベツェ・グロスとともに、大勢の左翼と同様、ドイツからパリへと逃れた。ヴェルサイユ条約下で委任統治領になっていたザールブリュッケンを選んだ者、あ

(17) Panchanan Saha, *Shapurji Saklatvala*, Delhi, 1970, p. 12. Hansard, *House of Commons*, vol. 186/705-19 より引用。

(18) RGASPI 495/100/938, p. 208.

るいは依然としてプラハを選ぶ者もいた。しかしドイツ左翼と多くのユダヤ人にとって、これら三つの安全地帯は監視と暗殺の危険に晒される場であり、最終的にドイツの強制収容所へと至る集散地であることは明らかだった。ミュンツェンベルクと妻グロスはユダヤ人ではなかったが、翌年から他の亡命者らとフランスに住んだ。かれらの多くがまだ共産主義者で、ハンガリー人ジャーナリストのアーサー・ケストラー、オットー・カッツ、そしてマネス・シュペルバーのような作家もいた。ミュンツェンベルクは二度の移動を経てモスクワへ行き、古参のボルシェヴィキたちと近しくしながら、一方ではコミンテルン指導部に報告し続けた。彼と妻グロスはモスクワ近郊の強制労働収容所を訪れたが、その際のことをグロスは後に衝撃とともに回顧している。しかしインド、中国、ヨーロッパからの亡命者の多くにとって、モスクワはもう一つの安全地帯と認識されていた。例えばグロスの妹マルガレーテ・ブーバー・ノイマンは第三帝国を逃れ、夫とともにモスクワにいた。

1933年9月、サクラトヴィラがハイド・パークで演説した事件の模擬裁判がロンドンで開かれた。ベルリンの神聖なる国会議事堂への放火の罪に問われた人々が、ロンドンのストランドにある法律事務所に設けられた模擬裁判所で「審議」されたのだ。ほかならぬミュンツェンベルクとケストラー、そのほかパリでの仲間たちがこの模擬裁判を企画し、イギリスの友人たちも協力した。裁判官の中には、アーサー・ガーフィールド・ヘイズがいた。彼は有力なアメリカ人弁護士クレランス・ダローとともに働くユダヤ系アメリカ人の弁護士で、スコッツボロー裁判にもかかわっていた。この国際法律家たちは被告人不在のまま「無罪」とした。その数週間後、その頃はまだ法の適正手続を踏んで行われていたライプチヒでの本物の裁判で、世界のメディアが見守るなか、かれらは、ナチの弁護士ですら反論できないほどの素晴らしい弁護を展開した。ロンドンとライプチヒでの二つの裁判をめぐる出来事は、ミュンツェンベルクが、野蛮な人種主義政策を含む初期のナチ政策を暴いた *The Brown Book of the Hitler Terror* を、イギリスの後押しで出版するきっかけとなった⁽¹⁹⁾。

ナチ政権奪取から6年のうちに、ユダヤ人が9割を占めるドイツ人・オーストリア人難民が、ロンドンを最初の亡命先にして逃れてきた。イギリスに落ち着いた人々の数は7万4000人に上り、そのうち10-15%は、1941年以前に中欧から逃れてきた人々だった。イギリス当局は、38年の反ユダヤ人暴動「水晶の夜事件」の後、遅ればせながら移民の制限規定を緩和したが、多くはその後の避難者だった。ユダヤ人救済組織が直ちに立ち上げられた。それらはイギリス左派による「ドイツ人救済」運動よりもずっと大規模で包括的だった。ユダヤ人や中欧人たちがロンドンに流入してくるにつれ、難民に関わる事業数は、宗教団体と活動家たち双方を圧倒するほどに達した。ドイツにおける差別に反対する3万人の在イギリスのユダヤ人たちによる、ロンドンのイースト・エンドからハイド・パークまで繰り出された1933年夏のデモは、そうした抗議活動の一つだった。

1934年までにコミンテルンは、ミュンツェンベルクがパリにいないときを利用して、37年

(19) World Committee for the Victims of German Fascism, *The Brown Book of the Hitler Terror*, London, 1933.

の除名へとつながる工作を、パドモアのときよりも節操のないやり方で行った。モスクワにいたミュンツェンベルクの信頼できる仲間は数年の内に粛清された。クレムリンにはもう彼の擁護者は残っていなかった。彼はそのことでようやくスターリン主義への疑念を確信したのである。ミュンツェンベルクと仲間たちはヨーロッパ規模の独立系ドイツ語雑誌 *Die Zukunft* を発刊し、数百人の購読者を得た。この出版事業は、チャーチルの個人秘書であるスイス人神学者カール・バルトや、自由党員でチャーチルの腹心であるヴァイオレット・ボナム・カーター、「労働者無党派連盟」と「アメリカ自由人権協会」のガードナー・ジャクソンのようなアメリカ人を含む広範囲のネットワークを築くことになった。アメリカの人種的分断に怒り、スコッツボロー事件に対して組織を立ち上げた人々は、いつの間にか、ナチ第三帝国の人種政策の万力に捕えられて海峡を越えてきたヨーロッパ人のために、労働許可証や住処を見つけることに日々を費やしていた。1934年以降、ファシズムへの強烈な怒りの前に、「スコッツボロー」はロンドンからほとんど消えてしまった。断固として、すべての問題とつながっていかうとするに十分な意思や時間は、もはやなかった。

ネルーも1938年にロンドンにやって来た。その際、大衆が一目彼を見ようと押し寄せたものだ。アフリカ系アメリカ人共産主義者で俳優・歌手のポール・ロブソンが歌を披露する一方、ネルーはパンカーストとともに登壇し、「真の反ファシストならば帝国主義を無視できるわけがない」と怒りをあらわにした。⁽²⁰⁾この際に集められた義援金は、中国へ派遣されるインドの医療チームへ送られた。新聞は聴衆に多数のインド人がいたことを報じている。その中には、当時まだオクスフォード大の学生で、後にインド首相になるネルーの娘、インディラ・ガンディーもいた。ネルーはミュンヘン会談についてこう書いている。「インドは強い興味を持って、この裏切りの悲劇を見守った。長き経験から、インド人民はイギリス政府の約束を信用しないことを学んできた。そして最近のイギリス外交政策は、なおもインド人民を驚かせ衝撃を与えた。」⁽²¹⁾ネルーはミュンツェンベルクの古い友人の一人で、1927年にブリュッセルで行われた「反植民地抑圧同盟」の発足会議でも同席し、ネルーの妻がスイスのローザンヌの病院で治療を受けている際にも再会している。ネルーはミュンツェンベルクが主宰する *Die Zukunft* にも寄稿した。パドモアもロンドンに現れた。彼は易々とは悪魔たちを休息させなかった。1937年、パドモアは *The Chicago Defender* に「ナチ支配下でのユダヤ人の状況は、南アフリカとアメリカ南部の黒人の状況と同じくらいひどい」と書き、「ドイツは人間の大虐殺をしようとしている」と明言していた。⁽²²⁾その後パドモアは、ロンドンで闘いが好転するのを待とうとした。

パリからは、ミュンツェンベルクの *Die Zukunft* が、ミュンヘン会談を、続いてスターリン＝ヒトラー協定を明確に批判し、「平和と自由が、ヒトラーとスターリンから守られなければ

(20) *Daily Worker* (London), June 19th and 20th, 1938, p. 2.

(21) *Ibid.*, Oct. 20, 1938.

(22) "Hitler will treat Jews like Blacks: Adopts South African Methods to Deal with Problem," *The Chicago Defender*, Nov. 13, 1937, p. 24.

ならない」と忠告した。⁽²³⁾ 1940年ミュンツェンベルクは、50歳以下のドイツ人を強制収容所に入れるとしたフランスのダラディエ政府の命によって、トゥールーズ近郊のル・ヴェルネ収容所に入れられた。妻バベット・グロスはピレネー山脈のギュール収容所に送られた。ナチによるフランスの陥落とともに、収容所の看守たちはル・ヴェルネの囚人を解放した。ミュンツェンベルクはマルセイユに向かって歩いているところを最後に目撃されている。そこで彼はフランス脱出の手助けをする連絡員たちと接触したが、首を絞められ腐敗した彼の遺体が、何カ月か後にドイツ軍の活動が及ばないような場所でフランス農夫に発見された。彼の死は、おそらくソ連の内務人民委員部（NKVD）の仕業だろう。NKVDは何年もの間ミュンツェンベルクを追って、おそらくル・ヴェルネ収容所に工作人員を忍ばせていたのだろう。彼はナチとソ連双方の暗殺者リストに載っていたのだ。妻バベット・グロスはギュール収容所から逃れられたが、彼女の義理の弟フランツ・ノイマンはソ連邦内の広域に点在する強制収容所グラグ（Gulag）で亡くなった。グロスの妹でフランツの妻だったマルガレーテ・ブーバー・ノイマンは最後まで生き延びた。彼女が収容所で書いた日記は、多くの現代史家にとってグラグについて知る重要な資料である。⁽²⁴⁾

フランス領スーダン出身の教師でパドモアの同志であり、またパリでの彼の同居人でもあったギャラン・クヨテは、ブーヘンヴァルトで亡くなった。収容所の犠牲者リストを探すうち私の共同研究者、イヴ・ローゼンハートが彼の名を確認した。パドモアは、戦争ジャーナリズムのキャリアを追求した。その仕事には、ジョモ・ケニヤッタとともに、マンチェスターで開かれたパン・アフリカ会議（1945年）を組織したことも含まれる。独立ガーナの初代大統領に就任したクワメ・エンクルマは、パドモアとデュ・ボイスほか著名人たちを政治顧問として首都へ招へいし、パドモアと妻ドロシー・パイザーは1956年アクラへ赴いた。しかしパドモアは重篤な病にかかってしまう。1959年、彼は治療を受けるためにロンドンに戻る帰路、心ならずも生涯の大半を過ごしたその地で死去した。彼の遺灰はアクラに葬られた。シルヴィア・パンカーストはその3年後に亡くなり、アジス・アベバに埋葬された。エンクルマは1966年のCIAによるガーナ政権転覆の後、亡命先で癌のため死去した。

マハトマ・ガンディーは、独立と分離をもたらした対英インド解放運動の流血の後、1948年に暗殺された。デュ・ボイスは1963年に死去し、ネルーは1964年、娘のインディラ・ガンディーはその20年後に暗殺された。アダ・ライトは1965年にテネシー州で亡くなった。一方ケニヤッタは、これら大戦間期の人的ネットワークのなかで、誰よりも長く、1978年まで生きた。スコットボロー事件の被告たちへの裁判は何度も行われ、判決も大戦をまたいで言い渡された。その結果、被告全員でじつに130年の刑期を務めることとなった。かれらが刑務所の内外で、アメリカと欧州の支援者たちより長く生き延びたのは、歴史の深い皮肉である。

第2次世界大戦後、大群衆がイギリス支配の下から姿を消した。ラッパを鳴らして帝国旗を

(23) *Die Zukunft*, September 1, 1940.

(24) Margarete Buber-Neumann, *Under Two Dictators*, New York, 1950.

下げる支配終焉の儀式によって、ではない。アジア、アフリカ、カリブ海地域での重大な、しばしば暴力的な政治的・社会的闘争を通してである。具体的に言えば、インドの分離独立や独立当初のマレー半島における悪しき反動のなかで、おびたしい数の人々が命を落としたのだ。アメリカに目を転じてみれば、戦後の市民権運動とその中心にあった黒人とユダヤ人の共闘は、積極的にジム・クローに立ち向かっていった。しかしこの第2次世界大戦後の歴史は、先行する大戦間期という時代からそう簡単に分けて考えることはできない。歴史の盲点という以上の問題であり、「補完の歴史」でもない。そうではなくて、人種的政策という研究対象は、戦前のイギリスの国際関係とイギリス史の土台部分について、我々に新たな理解を可能にさせるものなのだとここでは言うておきたい。本稿で扱った史料がそうであるように、新規に文書史料が公開されたり、既存のコレクションに新たな検証がなされたりした場合、そのとき、人はより良き歴史がそこにあったことを期待するものだ。しかし、その際に、深い概念的な飛躍が求められるということも念頭に置かねばならない。

『草競馬』や、ブラックフェイス・ minstrel の言葉づかいは、20世紀初頭のヨーロッパ文化に広まった。抑圧された人々を支援し、人種差別や社会的不公正と格闘しようとするときですら、革新主義者たちは、ハリウッドや旅芸人たちがふりまく人種的イメージを効果的に活用した。ハード主教のような元奴隷や、アダ・ライト、ジョージ・パドモア、それに偉大なジャズ演奏家レイ・アームストロングのような奴隷の子孫たちは、1930年代のヨーロッパ人にとって、奴隷制というシステムを象徴する人々だった。かれらは同情には値しても、自力で自らの運命を切り拓くには不向きな人々だと、しばしば見なされていた。スコッツボロー事件は、共産主義の寛容さ（この場合は被告の命を救ったという意味で）だけでなく、左翼自身が取った「人種」への姿勢やかれらが使う人種的言説というものをはっきりと示した。1950年代、パドモアは次のように書いている。「政治的意識を持った黒人たちは、30年代の人民戦線期に、アフリカ人を遅れた者たち、野蛮な部族民たちとしか見なさなかったイギリス人共産主義者の日和見主義に強い嫌悪感を抱いた。」⁽²⁵⁾この種の偏見は、かれらが植民地主義や帝国主義の問題を話題にしようとする際も引き継がれていった。ほかのたいていの人がそうであったように、共産主義者たちは、スターリンの外交政策にかれら自身の思考が支配され、そうなるように導かれると、反帝国主義を二の次と格下げするようになっていった。

「反革命分子」に対するモスクワ裁判（1936-38年）については、当時、活発に議論された。ロンドンでは、新聞が定期的に裁判の様態を報道していた。そのため、ハンガリー動乱の1956年あるいは「プラハの春」の68年まで待たずに、多くが共産党から去って行った。そこには去るべき十分な根拠があったのだ。そして、ロシアによるファシズムとの英雄的戦闘も、かれらを連れ戻すことはできなかった。共産党ヒエラルキーのなかでのパドモアやサクラトヴィアを含む非白人党員への扱いは、共産主義自体に元々根差した誤りの一つであって、集権国家の抑圧的機構や、スペインで起きたような闘争の犠牲に付随したものではなかった。

(25) George Padmore, *Pan-Africanism or Communism: the coming struggle for Africa*, London, 1956, p. 126.

民族の違いを土台にした抑圧的政策を実行する際、自国の何百万人も民衆を蹂躪する用意のあった国家が、1930年代に現れた有色の指導者たちをうまく利用したということがわかって驚くに値しない。さらに、ファシズム期のヨーロッパに形成された亡命者コミュニティ（本稿ではミュンツェンベルクのサークルを取り上げたがほかにも多くの亡命者集団がいた）は、モスクワを反ファシズムの砦と見なすことを止めた。時すでに遅かったが、かれらは自由主義者との共闘に動き出した。ミュンヘン会談とスターリン＝ヒトラー協定は、かれらの抱いていた最悪の恐怖を現実のものにした。連合国とモスクワのボスたちによって、かれらは売られたのである。

その時代が常に自由主義を活気づかせていたという見方もできる。イギリス帝国はしばしば自由主義者たちをむき出しの裸にした。サイモン夫妻は、奴隷制問題を使ってファシズムに接近し、あいまいなムッソリーニ支持を表明した、「人権派」の代表格だった。「人権」（それはたいてい回顧的にそう呼ばれるが）は、ヨーロッパにおける奴隷労働や何万人というエチオピア人の死を伴う外交政策にうまく利用された。30年代の人種政治の深い皮肉は、冒頭で紹介したニール・ファーガソンの巧みな問いかげのように、ファシズムとの戦争で帳消しにされることなどなかった。懲罰はイギリス人の上にそうたやすく下されなかったのである。ローデシアや南アフリカ、その他多くの地域における帝国植民の執着は、白人支配の維持をめぐる紛争を生み、あまりにも多くの命が犠牲になった。結果的にイギリスは、ときに圧倒的な力に直面し、あるいはスエズ危機の際のように、諸国間の裁定によって権益を放棄せざるを得なくなり、不承不承、支配の手を緩めていったに過ぎない。トニー・ジャットは、イギリス労働党首ハーバート・モリソンが植民地に独立を付与することについて、「子どもに鍵と銀行口座とショット・ガンを与えるようなものだ」と言ったことを我々に思い出させてくれる。⁽²⁶⁾ 人種的不公正からの解放と独立を求める当時の希望は、1930年代の記録と活動家の動向のなかに大切に保管されてきた。その頃のイギリス帝国とドミニオンの多くの地域に広がる状況は、厳しい監視と宣伝活動とに現れていた。一つの事例を挙げるなら、南アフリカのラント鉱山に当時よく出回っていた写真がある。それは、アフリカで最も豊かな、そして最大の白人占領地で、アフリカ人鉱山労働者たちがいかに苛酷な労働環境におかれていたかを示すものだった。

1955年の非同盟バンドン会議の演説でネルー首相は、1927年の「反植民地抑圧同盟」設立に言及し、この初期の多人種運動の試みを担った、すでに亡きドイツ人共産主義者を賞賛した。ほとんどが彼のことを知らない聴衆に向かって、ヴィリ・ミュンツェンベルクという名をネルーは演説のなかで繰り返したのだ。これら第2次世界大戦後の運動や機会は、それに先立つ時代がどういふものであったかを再び参照するものであり、イギリスの政治文化と、大西洋を越えた（トランスアトランティックな）あるいは国家を越えた（トランスナショナルな）歴史枠組みとの結びつきを、より強固なものとするだろう。⁽²⁷⁾

(26) Tony Judt, *Postwar*, New York, 2005, p. 280.

(27) 筆者は、これら第2次世界大戦後のテーマについて以下の論考を作成中である。“Fire by Night, Cloud by Day: exile, refuge and dissent in postwar London.”

【付記】

本稿は、2012年6月4日、大阪大学文学研究科世界史講座主催で行われた「グローバル・ヒストリー・セミナー」で、スーザン・ペニーバッカー氏による“Writing a ‘Transnational’ History—From Scottsboro to Munich: Race and Political Culture in 1930s Britain”と題された報告に、後日、若干の加筆・修正が施されたペーパーを翻訳したものである。

著者のペニーバッカー氏は、現在ノース・カロライナ大学歴史学部にて、イギリスの大戦間期における政治文化を中心に研究活動を行っている。しかしその研究範囲は、「トランスナショナル・ヒストリー」という彼女の歴史観にも表れているように、とてつもなく広い。今回の報告も、ロンドンを飛び出した「大戦間史」は、ヨーロッパ、アメリカ、ロシア、アフリカ、インド、そして西インド諸島と、大きく球体をめぐり、大勢の有名・無名の人物とその人生を巻き込みながら展開する。

今回、『パブリック・ヒストリー』掲載用にスーザンから送られてきた原稿には、6月の報告に使用した映像資料のほとんどについて、その掲載が許可されなかったことが記されていた。当日の報告を、その豊富な映像資料とともに楽しく拝聴した者としては、読者に対して大変申し訳なく思うが、どうかご容赦いただきたい。また、その結果、本来なら資料とともに説明されている文章が、訳者の技量不足のせいで、ぎこちないものとなっていることを重ねてお詫びする。

翻訳の際、電子メールでの訳者の質問に、スーザンはその都度、丁寧に回答してくださった。また訳出作業では、中野耕太郎先生から多くの助言を頂戴した。お二人には深く感謝申し上げます。もちろん翻訳上の不手際の責任はすべて堀内自身にある。お気づきの点をご教示いただければ幸いである。本稿の最後に言及されたように、「ポスト第2次世界大戦のトランスナショナル・ヒストリー」を論じたスーザンの新しい著書もまもなく世に出る。それを楽しみに待ちたい。

(堀内真由美)